

善導の弥陀身土論

——『女義分』二乗種不生論と曇鸞教義——

江 上 淨 信

中国にあって善導(六一三—八一)以前の主なる『觀經』積家としては、淨影寺慧遠(五三三—九二)、嘉祥寺吉藏(五四九—六三三)、玄中寺道綽(五六二—六四五)等があげられ、それぞれ法門の龍象として、中国仏教学史に大きな影響を与えた。しかるに道綽を除くこれらの諸師は聖道的教義の見地から『觀經』を解釈しようとするものであるから、善導と諸師との間には、教義上相容れないものがあった。

49 (江上) その教義上の相異については、九異(易行院)、十異(皆往院)乃至二十異(雲澗院)をあげることができる。しかし、『七祖交際弁』(雲澗院)に二十箇の相異も略していえば機教身土に撰まるといわれるように、九乃至二十異の主

要問題は機・教・身土に統攝せられるのであり、善導の古今楷定の意趣もこれに他ならない。就中、身土に関する諸師の説は、(一)淨土を報土と判ずる者は、凡夫の往生を許さず、(二)凡夫の往生を許す者は、淨土を低く応化土と判ずるのである。

しかるに善導は独り弥陀の淨土を以って是報非化と判じ、しかも凡夫往生を高調せられた。まことに善導のかかる報身報土思想は、師道綽のそれを承け、その微意を開顕せられたものであることはいままでもない。しかし、それはただ単に道綽の直接相承というよりは、むしろ道綽を介して邂逅された曇鸞の本願中心の立場を本質とすることによって、明確にせられたものと思われる。ここでは善導の

弥陀身土思想について、曇鸞・道綽のそれを考慮しながら『玄義分』二乗種不生論を中心に跡づけてみたい。

一

善導の身土思想に関する論述は、主として『玄義分』二乗門下の問答に示されている。即ち、前二番の問答における是報非化と、後三番の問答における五乘齊入、二乗種不生の会通の論理に見ることが出来る。

善導はその第一問答において、仏土について

「問曰、弥陀淨国為当是報是化也。答曰、是報非化」

といわれている。身土もとより不二であるから、仏身についても同様なことがいい得るのであって、「是報非化」とは阿弥陀仏及び弥陀の淨土が報身報土であって化身化土でないということである。

次いで三經を引証する第一に『大乘同性經』を取意撮要して

「西方安樂阿弥陀仏是報仏報土」

と報身報土の根拠を述べられている。ここにおいて、我々は善導の直接の師である道綽が『安樂集』第一大門三身三土義に、「現在弥陀是報仏、極樂宝莊嚴国是報土。然古旧相伝皆云、阿弥陀仏是化身土亦是化土。此為大失也」と

いい、『大乘同性經』に依り、報淨化穢を弁定して、「淨土中成仏者悉是報身。穢土中成仏者悉是化身」と開顯されていることを想起せしめられる。古旧相伝とは恐らく淨影等の諸師を指すのであろう。道綽は悲痛なる末法の時代的反省と罪濁の現実に対する自己批判に根ざして、「去三聖遙遠故」と「理深解微故」の二由をあげ、聖道の難証を示し、「唯有淨土一門可通入一路」の必然性を強張されたのであった。まことに時機相應の教法を磨き出すべく「此為大失」と断言されているのを見れば、いかに道綽が諸師の説を慨歎されていたかを推知することができる。殊に弥陀身土を報身、報土の語を以って顯示されたことは注意されねばならない。善導はこれを承け阿弥陀仏を報身仏であるとせられるのである。

蓋し、善導は澆末五濁の世界観とともに、現実の人間性そのものに対して、深刻且つ悲痛なる省察がなされている。このことは善導の著作の随处に見られるが、『玄義分』帰三宝偈の劈頭には、業縁の世界から逃れることのできなない自己の求道の現実相を「生死甚難厭 仏法復難欣」と厳しく批判されている。厭わるべき生死の世界にあって、仏法こそ欣求すべきにもかかわらず、現実は「貪瞋邪偽、奸詐百端、悪性難侵、事同蛇蝎」。雖起三業、名為雜

毒之善^レ亦名^ニ虚仮之行^一。不^レ名^ニ眞実業^一也」であつて、虚仮不実の自己に他ならない。かくして善導は人間存在の在り方を「自身現是罪惡生死凡夫（現在）、曠劫已来常没常流転（過去）、無^レ有^ニ出離之縁^一（未来）」と見出されたのである。その自覚は仏法に觸れ、本願念仏に遇うことによつて見出されたものであり、自覚を機縁として、人生の曠劫来流転の方向が、浄土の方向へと転廻せしめられたことを物語るものである。しかも、我々の救いは如来かねてしろしめて成就されていたのである。

次いで報身報土の意義を明確ならしめんと『無量寿経』を取意し

「無量寿経云、法藏比丘在^ニ世饒王仏所^一行^ニ菩薩道時
 発^ニ四十八願^一。一一願言。若我得^レ仏十方衆生称^ニ我名
 号^一願^レ生^ニ我国^一下至十念若不^レ生者不^レ取^ニ正覚^一。今
 現成^レ仏即是酬因之身也。」

と阿弥陀仏が酬因の身であることを高調されている。阿弥陀仏とは『往生礼讃』にいわれるように、「阿弥陀経及観経云。彼仏光明無量照^ニ十方国^一無^レ所^ニ障礙^一。唯観^ニ念仏衆生^一撰取不^レ捨。故名^ニ阿弥陀^一。彼仏寿命及其人民。無量無辺阿僧祇劫。故名^ニ阿弥陀^一」であつて、それはまさしく「称^ニ我名号^一願^レ生^ニ我国^一下至十念若不^レ生者不^レ取^ニ正覚^一」との

弘願大悲の本質そのものである。

思うに、如来は真如に出入自在であつて、智慧あるが故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せずして無住処涅槃を行するのである。大乘仏教の理念として、空勝義の眞実は、教法を通して自らを必然的に世俗の世界にあらわし、それによつて世俗の世界は空勝義諦に照らされ撰取されるのである。このような空勝義諦の世間的実用が慈悲といわれ、空勝義諦の智慧は必然的に利他の慈悲としてはたらくのであつて、そこに大乘の菩薩行がある。されば大乘の菩薩行において如来の態を三身として展開し、空勝義の智慧を法身、大乘菩薩行の完成態を報身とし、世俗の有限的世界に応じた態を応身と説かれるのは、悲智相即の理念に基づくものであつて、三身の態は本来それぞれ別々なものではない。それ故、報身という如来の態は空勝義の眞実智慧が世俗に媒介される慈悲的性格を示すものであつて、それは常に空勝義の世俗的实践としての菩薩行としてあらわされる他はない。ここに法藏菩薩の菩薩行を顕わすものが四十八願とその成就であり、その願に酬報の如来が阿弥陀如来である。如来が真如より来生する態であり、如来として来生するのは菩薩行を通してであると同様に、浄土もこのような菩薩行によつて、酬報した世界であることを知

らしめられる。ここに浄土は本願成就の報土であって、如来の智慧清浄業により成就せられた世界である。報土を示す種々の莊嚴は、真実を具体化せんために説かれたものであって、莊嚴を通して如来の願心を観知しなければならぬ。浄土の莊嚴が種々に説示されるのは、現実の業苦に即して、その業苦を無からしめんとする如来の願心を願わさんためであって、そこに報土といわれる所以がある。

善導は報身を主張されるについて、本願の上にその根拠を見出し、しかも四十八願の一一の願に第十八願の意があることを示し、四十八願は第十八願に該攝されることを明していられる。その因願に酬報の仏が報身といわれることは、真如法性より来現の如来の態を因位法蔵菩薩の発願に見出されたことに他ならない。因願が真如法性の全現であつてこそ、寂靜止に住しつつ、任運無作に大悲利生を行ふことができる。蓋し、本願は無明煩惱に蔽われた衆生に即してはたらく如来の智慧のはたらきであるから、無窮のはたらきであつて、法蔵菩薩の願行も兆載永劫において積植せられる。しかも因位の本願は果上の神力からいえば、十方衆生の無明煩惱を照破すること無碍自在である。因願と成就とは果上の神力がなければ、因位の本願は成立せず、因位の本願なしには果上の神力はないという絶対矛盾

の同時成立でなければならない。まことに如来は十方衆生若不生者不取正覚という法蔵菩薩の態において、その果上の神力を示されたのである。

かくして、第二の引文を通して善導の身土観には、その成立原理ともいふべきものとして願心莊嚴、願力成就といふことが注意せられていることが指摘される。願心莊嚴、願力成就といふことは、下に至つて凡夫人報の義を明かす問答にも示されている。即ち「垢障凡夫云何得入」との問に対して、「答曰、若論衆生垢障一実難一欣趣、正由託一仏願一以作一強縁一致使三五乘者入」と、垢障を論ずれば欣趣しがたき凡夫が、仏願力に全託することによって、そのまま報法高妙の浄土に往生することを論証せられたものであるが、その願力の妙用があることは、浄土が実に願心莊嚴、願力所成の世界であるからであつて、ここに報土の報土たる所以が明らかにせられている。しかも浄土が願力所成の報土であることは、善導の他の著作にも広く見られるところで、如何に深くこの点に関心を示されたかを窺うことができる。『序分義』には「此明三弥陀本國四十八願。願々皆發三增上勝因。依一因起三於勝行。依一行感三於勝果。依一果感三成勝報。依一報感三成極樂。依一樂顯三通悲化。依一於悲化三顯一開智慧之門」といひ、『往生禮讚』には「觀一

彼弥陀極樂界一 广大寛平衆宝成 四十八願莊嚴起 超諸
 仏刹一最爲精(乃至) 普勸帰一西同ニ彼会一 恆沙三昧自然
 成」といって、諸仏の国に超勝する所以は全く本願の莊嚴
 より生起したものであることを顕わし、自然成は浄土が
 願力自然の所成の浄土であることを明かすに他ならない。

『般舟讚』には「相好莊嚴無殊異一 皆是弥陀願力成」と
 いい、「光能變現希奇事一 尽是弥陀願力作」といい、ま
 た「一入涅槃常住国一 徹窮後際更何憂 念々時中常証
 悟 十地行願自然成」等といわれている。これらは浄土が
 願心莊嚴、願力所成の世界であることを示すものであり、
 願心莊嚴の浄土であるから報土であることは明らかであ
 る。而して浄土が願心莊嚴、願力所成の世界であることは
 『論註』に顕示せられるところであるから、しばらくその
 展開を窺ってみたい。

曇鸞は『論註』に三嚴二十九種莊嚴を積顯するにあた
 して、上巻においては常に一一の莊嚴の下に、「仏本何故起
 此莊嚴」或は「仏本何故興此願」と徴起して、菩薩所
 觀の不実功德の世界を明かし、それに対応して眞実功德相
 としての浄土が莊嚴せられるに至った仏因位における大悲
 の願心の意義を明らかにし、それによってその莊嚴の体性
 を論明されている。而して下巻においては『論』の「彼仏

国土莊嚴成就不思議力」という意により、「此云何不
 思議……焉可思議」といって、一一の莊嚴果成の相を説
 いて不可思議の力用を明らかにされている。以下その点を
 特に注意せられた莊嚴功德について見て行きたい。

国土十七種莊嚴の総相といわれる清淨功德積下には、
 『論』の願心莊嚴の意を承けて、如来の本願の生起本末を
 説き、そのもとづくところを因位法蔵菩薩の慈悲正觀に求
 め、それによって照し出された現実の世界を「見下三界是
 虚偽相、是輪転相、是无窮相、如三界蠶修環、如蠶繭自
 縛。哀哉衆生締此三界顛倒不浄」といわれている。それ
 は有漏心より生じて法性に順ぜず(顛倒)、雑染(不浄)
 の世界である。現実の衆生が業苦に沈倫するのは、有漏雑
 染の顛倒不浄によるからであって、大悲の願心は、このよ
 うな衆生を救済しようとして、畢竟安楽大清淨なる浄土
 を得しめんと発願されたのである。それ故に浄土は勝過三
 界道の世界であって、菩薩の無漏清淨の智業により、法性
 に順じ修起されたものとして、無漏清淨でなければならな
 い。「能生既淨所生焉得不浄」故言隨心淨「仏土淨」「因
 淨故果淨」とはこれを顕わすものである。浄土の清淨(無
 漏)は、雑染(有漏)とはその成立根拠を異にし、対立し
 ながら、しかも対立を超えて雑染を清淨ならしめるという

絶対清淨である。この意味の清淨功德によって莊嚴された世界が淨土に他ならない。したがって淨土の依正二報、器世間清淨、衆生世間清淨といわれるのである。清淨功德は淨土を淨土たらしめる根本性格であり、「清淨是總相」といわれる所以である。かくて淨土の勝相を「安樂是菩薩慈悲正觀之由生、如來神力本願之所建」と因位法藏菩薩をあげて慈悲正觀といい、果上の阿彌陀如來をあげて如來神力といつて、淨土が因願酬報の眞實報土であることをあらわし、「胎卵濕生緣_レ茲高槽、業繫長維從_レ此永斷。統括之權不待_レ勸而響_レ曰、勞謙善讓齊_レ普賢_二而同_レ德_一」と三界の業繫を斷ち、淨土の菩薩は自利成就し、利他大悲の普賢行を修することを顯わされている。

性功德積には、淨土の性について、四義を以つて論じられてゐる。第一は性は本の義であつて「淨土隨_レ順法性_一不_レ乖_レ法本_一事同_レ花嚴經寶王如來性起義」と、法性眞如がそのまま全現せられるところを淨土の本性とするといわれ、淨土と涅槃は不二不異のものであることが示される。第二は性は積習の義であつて淨土は法藏菩薩が因位に「集_レ諸波羅蜜_一積習所_レ成」の世界であることを示し、第三は性は聖種性の義であつて法藏菩薩が世自在王仏の所で無生法忍を悟り、その位を聖種性といふのであるが「於_レ

是性中_一發_レ四十八願_一と、その本願によつて修起されたのが淨土であるといわれる。ここに淨土が本願酬報の世界であることが明かされている。第四は性は必然不改の義であつて、安樂淨土は清淨の性成就であるから、往生する者は不淨の色・心なく畢竟皆清淨平等無為法身を得ると示される。このように性の四義は法藏菩薩の願心の始終を示すものに他ならない。そして眞如法性が等流現行して、法藏菩薩の願行の上に体现せられる所以を「以_レ諸法平等_一故發心等、發心等故道等、道等故大慈悲等、大慈悲は仏道正_一因」といい、「安樂淨土從_レ此大悲_一生故、故謂_レ此大悲_一爲_レ淨土根_一」と淨土が出世の善根である正道大慈悲を根本として生起した旨趣を明らかにせられた。蓋し、大慈悲を淨土の体性とし本質となすということは、淨土がこの大慈悲の行ぜられるところであり、またそれを限りなく出生するところという意を孕むものである。即ち正道大慈悲は、法藏菩薩の願行の上に見られるところであるが、それは淨土そのものの土徳となり、往生者の上に具現されて、正道大慈悲を行ずる菩薩を出生することを示している。それ故、

下卷の性功德には「生_レ安樂_一衆生亦復如_レ是、生_レ彼正道世界_一即成_レ就出世善根_一入_レ正定聚_一といわれるのである。不虛作住持功德は仏莊嚴功德八種の中心であり、しかも

三種成就願心莊嚴といわれる願を明かすものがこの功德であるから、三嚴二十九種莊嚴の眼目をなすものである。善導が報身土を示す因願酬報の本願の意趣も、この功德における本願力に見られる。下巻に「不虛作住持功德成就者蓋是阿弥陀如来本願力也」といい、不虛作の義について、

「依_レ本法藏菩薩四十八願今日阿弥陀如来自在神力、願以成_レ力、力以就_レ願。願不_ニ徒然、力不_ニ虚設。力願相持畢竟不_ニ差、故曰_ニ成就_一」と本願力を因果に分けて積されている。因位の本願があっても、果上の神力がなければ願は徒然であり、果上の神力があっても、因位の本願がなければ自在神力は虚設となるのである。因位の本願を以って果上の神力を成じ、果上の神力を以って因位の本願を就すところにも本願力は全きを得るのであって、本願に遇う者が空過し退没することなく、速かに無上菩提を満足せしめられる所以がある。

更に浄入願心章には、『論』の「三種成就願心莊嚴」を「此三種莊嚴成就、由_三本四十八願等清淨願心之所_ニ莊嚴_一因淨故果淨、非_ニ無_レ因他因有_二也_一」といい、浄土の三種莊嚴が、法藏菩薩の四十八願に示される清淨願心を因として成就されたことを示されている。蓋し、願心の因が清淨であるのは、その願心が広(三種莊嚴)略(一法句)相入自

在である法藏菩薩の願心だからである。この広略相入を法性・方便の二種法身に見出し、「由_三法性法身_ニ生_三方便法身_一、由_三方便法身_ニ出_三法性法身_一、此_二法身異而可_レ分、一而不_レ同、是故広略相入、統以_三法名_一」といわれる法性法身と方便法身が一法句(略)と三種莊嚴(広)に対応することはいうまでもないが、二種法身の關係を由生、由出の語で示されている。円乗院は生とは起、出とは顕であり、法性法身は体、方便法身は衆生を利他する用であって、体から用を起すことを「由_三法性法身_ニ出_三方便法身_一」といい、また法性法身は所証の理として性であり、方便法身は能証の智として修であるから、修によって性を顕わす意を「由_三方便法身_ニ生_三法性法身_一」といわれる。法性より法藏菩薩と出られたのは、体より用を起すものであり、世自在王仏の所において四十八願を発し、その願成就して阿弥陀仏となられたのは、修によって性を顕わされたのである。法性平等の所証の理より方便法身の相を顕わして発された四十八願であるから、この願清淨であり、法性清淨の性より顕われる大悲の願心であるから願心また清淨である。願心清淨であるから、三種莊嚴もまた清淨であるといわれる。

上來、報身報土の意義について、願心の展開を『論註』の所明によって窺ってきたのであるが、善導が是報非化の

論理を展開するに十八願加減の文を以つて酬因の身土とせられる根拠は、まさしく『論註』に顕わされる願心莊嚴願力成就の原理によって、根底的に支えられているというところができよう。しかも『同性経』の引文の意趣も『無量寿経』の引文の旨趣に結歸されることを思わしめられる。

かくて是報非化を教証する第三の引文としての『觀経』に

「上輩三人臨命終時、皆言阿弥陀仏及与三化仏来迎此人。然報身兼化共来授手、故名為与」

と説かれるのは、上三品の往生人を矜哀して本仏が化仏を伴つて来迎せられるのであるから、本仏は報身でなければならぬとせられる。先の『大経』の引文が因を挙げて示されるのに対し、『觀経』の引文は果を挙げて報身の義を証誠せられるのである。ここに来迎の相に依り、報身を顕わそうとせられるのは、真如法性の方便応化の原理を『觀経』の上に具体的に見出されたからであり、これも亦『論註』の仏身觀に顕わされているところである。しかも『觀経』引文の意趣は第二の『無量寿経』の引文に根拠するものである。

而して、善導は諸師が弥陀を応身なりとの主張に対して「報応二身眼目異名」

と応身は報身と眼目の相異であつて、化身のことではないとされる。そして、(一)訳者の用語例から

「前翻報作応後翻応作報」

といひ、(二)語義上から

「凡言報者、因行不虛定招来果、以果応因故名爲報。又三大僧祇所修万行、必定應得菩提。今既道成、即是応身」

と因願に應報するという意味において、報と応は本質的に何等相異するものでないと思はれる。ここに「因行不虛定招来果、以果応因」は、『論註』の「願以成力力以就願、願不徒然力不虛設、力願相苻畢竟不差別」の文と相應し、善導また報の義を如来の本願力に求められていることを想起せしめられる。まことに報身の意義が上述のようであれば

「縱使無窮八相名塵沙、剋躰而論衆歸化撰」

といわれるべきものである。

まことに善導の是報非化を顕わされる引文の意趣は、『無量寿経』の十八願加減の文に示される因願酬報に結歸される。しかも報身報土は『論註』に顕わされる真如法性の等流顯現であり、莊嚴仏事として能く衆生を畢竟淨に入らしめる力用をなし、それは如来の大願業力によって、大

涅槃を証得するに至らしめられるのである。仏身仏土は願力の果報でありつつ、それは願心の内容に他ならない。かくて因願酬報、報身報土が領解され、因願酬報が報身報土を規定される根拠となるのである。

二

善導は第二問答において、諸師が『観音授記經』に「阿弥陀仏亦有入涅槃時」と説くことを証権として、弥陀は有量の無量寿にして応身なりと判ずる論難を提起された。

思うに、道綽は『安樂集』第一大門三身三土義において、『授記經』の弥陀入涅槃説に対して「此是報身示現隱没相_ニ非滅度_ニ」^①といひ、『授記經』の「仏涅槃後或有衆生不見_レ仏者_ニ。有_三諸菩薩得_三念仏三昧_ニ常見_三阿弥陀仏_ニ」の文に着眼し、「彼經云阿弥陀仏入涅槃後復有_三深厚善根衆生_ニ還見如_レ故即其証也_ニ」^②といわれている。そしてこの報身隱没相について、唯識系の論である『究竟一乘宝性論』の報身自在神力の徳を顯わす五種相即ち説法、可見、諸業不休息、休息隱没、示現不実体を引用して、弥陀に入滅の相があるからといって、必ずしも眞の滅度でなく、報身五種自在相中の一相であることを論じていられる。『授

記經』に入滅ありというのは、報身が隱没の相を示現することをいったものであって、眞の入滅でないことを論じ、機の感見に依つて、入滅を見る旨を弥陀入滅後に深厚善根の衆生があつて、還つて弥陀を見ること故の如しということがその証とあらわされた。したがつて『授記經』の説は化身の相ではなく、むしろ隱没の相こそ却つて報身であることを証するものである。

蓋し、善導は

「不入義者唯是諸仏境界、尚非三乘淺智所闕、豈況小凡輒能知也」

と不入の義が唯仏与仏の知見であつて、諸師の淺智を内省すべきことを示し、更に教証として大乘經典を代表する『大品般若經』の涅槃如化品に仏をも含めた一切法の如化、不如化に関する積尊と須菩提との問答を引証されている。

即ち、先づ仏は須菩提に対して、

「色即是化、受想行識即是化。乃至一切種智即是化」

と一切法の如化を説き、須菩提の問に應じて、涅槃への智慧を得るための実践道である四念処・四正勤等の三十七道品、三解脱門、十八不共法、諸の煩惱の断道等の出世の法も如化であるといわれている。次に「有_三聲聞法變化_ニ……

以是因縁故一切法是化」といい、更に「無誑相・涅槃是法非變化」といって、最後に

「諸法平等……若新発意菩薩聞是一切法皆畢竟性空、乃至涅槃亦如化者、心則驚怖。為是新発意菩薩故分三別生滅者如化、不生不滅者不如化耶」

と説かれている。仏の涅槃を常住であり、非化といわれるのは、生滅法の如化であるものに対して説かれたものであり、一切法諸法畢竟不可得の立場からいえば仏の涅槃もまた如化であり、空不可得である。この経説からすれば、如来の報身も如化でなければならぬ。したがって『授記経』に弥陀入滅が説かれることも報身の如化をあらわすものと見られる。かくて

「今既以斯聖教驗知、弥陀定是報也。縱使後入涅槃、其義無妨。諸有智者慮知」

という善導の会通はなされたのである。

この会通は、出世の法も涅槃も共に如化ということによって、かえって出世の法と涅槃との一味であること、即ち極楽無為涅槃界ということをあらわすのであって、阿弥陀仏の報土が涅槃を体とすることを示すといえよう。このことは善導の著作に広く説かれるところであって、無漏業所感の境であり、無漏の勝相を示すものは、積名門に依報の

地下・地上・虚空莊嚴を説いて「如前雖有三種差別、皆是弥陀淨国無漏真実之勝相」といい、「言真依者……

由是彼国真実無漏可見境相故」といわれている。『定善義』地下莊嚴には「明・幢体等は無漏金剛」といい、地上莊嚴には「明・浄之義即無漏為体也」といい、宝池觀積には「言金剛者即は無漏之体也」といわれ、『散善義』廻向發願心積には「云何一生修福念仏、即入彼無漏無生之國、永得証悟不退位也」等と浄土が無漏であり、一の莊嚴にもその無漏相状が説示されている。しかも体相ともに無漏である所以は『定善義』に「諸宝樹、皆從弥陀無漏心中流出、由は仏心は無漏故、其樹亦是無漏也」といわれるように、弥陀の無漏清浄業の所成によるからである。このように浄土は無漏涅槃を体とするものであるから、その土における証果は無漏無生・無為法性であり、したがってその快樂も衆生の貪著を離れしめられる法楽でなくてはならない。『玄義分』には「証法性之常樂」「証彼無為之法樂」等といい、『定善義』には「西方寂靜無為樂、畢竟逍遙離有無」といい、『法事讚』には「從仏逍遙歸自然、自然即是弥陀國、無漏無生還即身、行來進止常隨仏、証得無為法性身」等広く説示されている。蓋し、善導は一方において浄土を具体的に顯示した指方立

相論を展開し、その相状が法性の顕現として如来の願心莊嚴の報土であることを示されていることを忘れてはならない。このように報土が無漏清淨の業感の境で無漏を体とし、無為法性無生を証すべき無為涅槃界であることは曇鸞教学にその意趣を見出すことができる。

『論註』には廿九種莊嚴の総相といわれる清淨功德積下に淨土が不虛偽不輪転の畢竟安樂大清淨処とその全相を標示し、常樂我淨の四徳円満の涅槃界であることをあらわし、しかもその莊嚴功德を法藏菩薩の慈悲正觀に求め、法性隨順の無漏清淨業によって顯われるとしていられる。下巻には不可思議の力用を「有_二凡夫人煩惱成就_一亦得_レ生_二彼淨土_一、三界繫業畢竟不_レ牽、則是不_レ斷_二煩惱_一得_二涅槃分_一」と淨土が大涅槃の境界であることを示されている。妙声功德積には「若人但聞_二彼国土清淨安樂_一、剋念願_レ生亦得_二往生_一即入_二正定聚_一、此是国土名字為_二仏事_一」と国土の名字が衆生摂化の仏事をなすことを積顯し、淨土が有無を超えた涅槃界であることを示していられる。主功德積にあっては「彼安樂淨土為_二正覺阿彌陀善力_一住持」_一と淨土が涅槃のさとりに住持せられていることを示し、眷屬功德積には「彼安樂国土莫_レ非_二是阿彌陀如來正覺淨華之所_一化生……同一念仏無_二別道_一故、夫四海之内皆為_二兄弟_一也。眷屬無

量」と四海の内皆兄弟として一味平等眷屬の世界であるのは、如來正覺淨華の涅槃から化生するからに他ならない。また大義門功德積には、淨土の証果を説いて、衆生の機類は本は則ち三々九品の別があるけれども、今は一二の殊異なき平等涅槃なりとし、二乗の種の生じない純一大乘善根の境界であるといわれるのは、淨土が涅槃を体とし、涅槃より顯われた境界として大悲摂化されることを意味する。善導は明敏にこの点を把握され、曇鸞教学における淨土觀を正しく伝統し、弥陀身土が報身報土であることを顯説せられたのである。

三

前二番の問答において、報身報土は因願酬報であり、弥陀入不入の間から却って極樂無為涅槃界、弥陀の妙果無為涅槃を顯わされた。弥陀の本願は「若我得_レ仏十方衆生稱_二我名号_一願_レ生_二我國_一下至_二十念_一若不_レ生者不_レ取_二正覺_一」であり、この願成就の故に弥陀は報身であり、しかも、また願成就の故に十方衆生はその報土に生ずることができるのである。蓋し、撰論家においては淨土を高大微妙の世界として凡夫の直入を認めないのである。ここにおいて善導は能入の機（凡夫入報）を明確ならしめるべく

「問曰。彼仏及土既言報者、報法高妙小聖難階、垢障凡夫云何得入。答曰。若論衆生垢障、実難欣趣。正由託仏願以作強縁、致使五乘齊入。」

と問答されている。地上の菩薩でなければ報土往生は可能でないところから、衆生の機相を論ずれば凡夫の報土往生は実に欣い趣くということはできないと来難を許してはいられる。けれども更に「正由託仏願等」と仏の願力によつて往生せしめられるから、凡夫二乗であっても、機に簡びなく、五乗齊入と弥陀不共の利益をあらわして間に答えられたのである。まことに十方衆生を救わんとの本願に依つて弥陀は報仏となり、称我名号の本願に乗托して、衆生は報土に往生するのである。されば衆生の報土往生も弥陀が報身であることも本願に依つて成立するのである。このようにすべて仏願力の然らしむるところという思念は、『無量寿経』に「其仏本願力皆悉到彼国」といい、『淨土論』には「觀仏本願力遇無空過者」等といわれ、更に『論註』にもその旨趣を窺うことができる。

『論註』については、既に触れたように、淨土の依正二報がすべて願力所成であり、仏身については法性・方便の二法身に分ち、淨入願心章には淨土莊嚴の広略相入する所以を示すについてその名を出し、阿弥陀仏は法性法身（一

法句）と不二不異である方便法身であることを示された。淨土に往生する衆生を解釈するについて上巻末には八番問答を設け、逆惡の凡夫であることを示し、『論註』一部を貫く根本精神が、実に如来の本願力による凡夫入報であることを開顯されたのである。而して道緯亦『安樂集』に淨土を報土となし、凡夫の往生を勧められている。

善導の凡夫入報説は、これら各祖の微意を發揮せられたものに他ならない。蓋し、本質的には曇鸞が他力を顯わす三願の証における「縁仏願力故住正定聚、住正定聚故必至滅度」であり、直接には大義門功德に「仏以本願不可思議神力撰令生彼」等といわれるのを今ここに「正由託仏願以爲強縁」等と本願力に求められたのである。序題門には「一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿弥陀仏大願業力爲増上縁」といい、彼此照応して善導の意趣を領解しなければならない。

四

上述のごとく、善導は曇鸞教學受容において、正由託仏願を以つて機に簡びなく五乗齊入する旨趣を詮顯せられた。蓋し『觀經』には二乗のある相を説かれ、『淨土論』には二乗種不生と論示されている点に注意せられている。

二乗種不生の論義はいうまでもなく、『浄土論』の「大乘善根界 等無譏嫌名」女人及根欠 二乗種不生」から起つたのであるが、論主自らこれについて、長行には弥陀の浄土には二乘人・女人・諸根不具人の三が実体は勿論のこと名称すらなく、往生人みな平等一相であることを論示せられている。而して曇鸞は仏經と『論』との会通を論じ、しかもこれを端緒として、大乘門即ち一仏乗であることを明らかにされている。曇鸞の意趣は『大經』の「但因願余方二故有三夫人之名」の義を根柢としているものであって、浄土の聖衆としての声聞緣覚の二乗は一乗教三乗教相對立して、二乗を毀斥するような嫌貶譏誹の意は毫末もあるべきではない。事實は所証平等大乘一味の菩薩の聖衆であるが、そこにはあらゆる声聞緣覺善惡男女を摂めつくし、淨華衆としてゐることをあらわさんために曾つての名を存して國中声聞乃至天人等といわれているのである。それ故に事實として浄土には二乗は存在せず大乘の菩薩のみと説かれるのである。『論』に二乗種不生といわれるのは、「謂安樂國不生二乗種子、亦何妨三乘來生耶」である。また二乗が浄土に生ずべき所以について、声聞は必ず浄土に生じてこそはじめて成仏の究極目的を達成し得る旨を積極的に論証し、二乗が浄土に生ずればもはや二乗で

はなく、尽く大乘一味となるとされるのである。まことに浄土は二乗のために門戸を閉ぢているものでなくて、実は一切皆成仏の門でなければならぬ。むしろ根柢の種といわれ、菩薩の死屍と称せられる二乗の如き、実に生ずべからざるものが「仏以本願不可思議神力攝令生彼、必當復以三神力生其無上道心」といわれる世界である。まことに「五不思議中仏法不可思議、仏能使聲聞復生無上道心、真不可思議之至也」であつて誓願不可思議の他はない。下巻には「願往生者、本則三三之品、今無一二之殊、亦如溜澗一味、焉可思議」と浄土が大義門功德成就の所以を明かしていられる。

思うに『浄土論』は三經通申論といわれ、別して『大經』の要義を論じたものであることは明らかである。それ故に曇鸞が『論』を註解するに際して、『觀經』等に注意されているが、その中心となつてゐる經典は『大經』にあつたことはいなめない。善導においては、『大經』のみならず『觀經』に対して特に深い関心を示されている。『觀經』九品を意味する曇鸞の「本則三三品今無一二之殊」を端緒として、三輩九品に説く極樂に声聞果を得るとする文に注視せられている。されば善導の二乗種不生論は如何に展開されているのであろうか。

善導は『論』に女人及根欠二乗種不生といひ、『観経』には浄土に二乗のある相が説かれているが、この経論の相異は如何と問題を提起されている。これに対して、初めに固執を誡め、疑情を却けんとし、『観経』下上品の文を取意し

「或有_三衆生_二多造_三惡法_二無_レ有_三慙愧_二。如_レ此愚人命欲終時、遇_三善知識_二為_レ說_三大乘_一、教令_レ稱_三阿彌陀仏_一、當_三稱_レ仏時、化仏菩薩現在_二其前_一。金光華蓋迎還_三彼土_一。華開已後、觀音為_レ說_三大乘_一。此人聞已即發_三無上道心_一」

と下上品の行人が浄土へ生じて大乘法を聞き、大乘菩提心を発すと示し、もはや小乗の声聞縁覚も二乗の心を生起しないからこれを二乗種不生なりと顯わされている。

而して『観経』には無上道心といひ、『論』には二乗種不生という心と種について

「但以取_レ便而言、義無_三差別_二」

と、その意義には更に差別がないことを示された。種は因種の義であり、仏道への発心は証果の因種となるから、発心の義意から心を種と同義に見られたのである。

かくて下三品の往生者に関し

「此三人俱在_レ彼發心、正由_レ聞_レ大即大乘種生。由_レ不_レ聞_レ小故、所以_二大乘種不_レ生_一。凡言_レ種者即心也」

といひ、次いで中二品について

「又十方衆生修_三小乘戒行_二願往生者、一無_三妨礙_一、悉得_二往生_一。但到_レ彼先証_三小果_一、証已即轉向_レ大。一轉向_レ

大以去、更不_三退生_二二乘之心_一故、名_三二乘種不生_一」

といわれている。愚惡の機として大小不定の下三品は勿論、中二品の小乗の機も彼土に生ずれば、小乗の小果を証するにとどまることなく、全てひとしく大乘一味の証果を証するから、二乗種不生という述べられている。

このように善導における二乗種不生は、先の五乘齊入に見られた曇鸞相承の願力不可思議を基盤として、『観経』との会通を論じられている。二乗種不生の生を諸師が往生の義として、二乗の往生を否定したのに対し、善導は曇鸞を相承し、これを生起の義とし、二乗も往生後は二乗の種を生起しないとされている。ただ種の字について、曇鸞は種子の義と見られたのに対して、善導は種を心と同義語として二乗のものも往生すれば大乘心となるといひ、その意の帰するところは一である。しかし、殊に曇鸞が発菩提心して往生すと説き、二乗のままでは往生することを認めなかつたのとは相異し、善導においては、二乗は二乗のまま往生して、後に能く発心すると説示していられることは、底下の凡夫に対して往生浄土を可能ならしめる根拠となる

ものであり、曇鸞の仏願力不可思議は新たな表現をもつて顯示せられたのである。

五

上来、善導の弥陀身土論について『玄義分』二乗門下に示された意趣を窺ってきたのであるが、その所論は道綽が『安樂集』に三身三土義を開説して論ぜられるに比較し、二乗種不生を論ずる序論的方法において、報身報土説を展開され、その展開も道綽のそれより簡約、微細に及ばない面が見られる。しかし、それは道綽、善導二師の担える時代的課題によることは勿論であるが、道綽にあつては、末法史観に深き基調を置き、浄土の正依の經典以外に諸師も首肯するところの經、論等を求められたのである。善導は『散善義』に「此義已請証定竟。一句一字不可加減。欲_レ写者一如_レ經法。応_レ知」といわれるように菩薩、人師の所論を正引しない積体をなし、飽くまで自信を高調せんがため『大經』を証拠とされたことに依つて簡明であるといえよう。

善導の弥陀身土論の根本的立場は、如来の本願を基盤とし、しかもそれは師道綽を通して邂逅せる曇鸞教学の受容に依るものであることを知ることができる。善導は弥陀身

土を是報非化と判じ、その教証として『大乘同性經』『大經』『觀經』の文を取意引証し、『大乘同性經』は道綽が三身三土義に浄土中成仏報身説を論拠とされたものを襲用されたが、報身報土立論の中心は『大經』第十八願加減の文の因願酬報に置かれている。善導は本願の重要性を信知し、真如より來生來現の如来の態を因位法藏菩薩の発願に見出されたのである。因願が真如法性の全顯であつてこそ能く大悲利生し得るのであり、それは因における願と果における力と互に相成じて、衆生を撰して無為涅槃の証を得しめることに他ならない。ここに弥陀本国四十八願といふことができるのであつて、仏身仏土は願力の果報でありつつ願心の内容であり、報身報土が因願酬報として顯說せられるのである。また不入涅槃の間について『大品般若經』を引証し、涅槃如何をもつて却つて弥陀の妙果無上涅槃であり、極樂無為涅槃界と報土の体が無漏涅槃であることをあらわしていられる。これらのことは『論註』に能く顯說せられているところである。

更に善導は五乘齊入を示して、凡夫入報を明かす一段において、正しく仏願力に乗托することによって、垢障の凡夫がそのまま報法高妙の報土へ往生する旨趣を明かし、衆生の往生も弥陀が報身であることも本願力に依ることをあ

らわしていられる。これらは『論註』に浄土依正二報が願心莊嚴の世界であり、願力所成の報土であることを示すことに基づくもので、如来の本願力を本質とする曇鸞相承によるものと領解せられる。而して二乗種不生の会通においては、道綽の未だ触れなかった課題であり、善導は曇鸞を相承して二乗種子(心)不生起説の立場において『論』と『観経』との会通を論じ、新たな課題の解決を展開していられる。

宗祖が『教行信証』真仏土巻において真仏土の意義を明かす証文として、『論註』の清浄功德、性功德、大義門功德等の七文に引続き、善導の是報非化、五乗齊入の上来の諸文を引用し、報身土の意義を顕説されていることは、上述の旨趣を看破されたことに依るものであるといわねばならない。

註

- ① 藤原成章教授「善導の古今楷定と曇鸞の教学」『真宗研究』第一輯。「善導浄土教と曇鸞教学」『大谷大学研究年報』第二十集。
- ② 稲葉秀賢教授『真宗概論』一一八頁。
- ③ 大原性実氏『善導教学の研究』二四八頁。
- ④ 香月院深励師「註論講苑」上『新編真宗大系』第五卷一八一頁。
- ⑤ 円乘院宣明師「広文類聞誌」下『新編真宗大系』別巻一二七〜一二九頁。
- ⑥ 皆住院鳳嶺師「観経玄義分庚申記」『新編真宗大系』第七巻二一九頁。
- ⑦ 金子大栄氏『教行信証講読』第三巻一七八頁。
- ⑧ 柏原祐義氏『観経玄義分講要』三〇三頁。
- ⑨ 金子大栄氏『教行信証講読』第三巻一八六頁。
- ⑩ 神子上龍恵氏「善導大師の他力往生説」『真宗学』第十七・十八号六二頁。

(本学助手、真宗学)